

**Remarks by Dr. S. Jaishankar Hon'ble External Affairs**

**Minister at the Raisina Roundtable @ Tokyo**

**March 07, 2024**

**(Unofficial Japanese translation)**

\*\*\*\*\*

この度、東京で開催される運びとなったライシナ対話への出席が叶い、嬉しく思います。本対話の開催に向け、ご尽力くださいましたオブザーバーリサーチ研究所、株式会社国際協力銀行、そして経済同友会の皆様に感謝申し上げます。本対話は、特別かつ戦略的なグローバルパートナーシップを享受するインドと日本が、今日、世界秩序が直面する課題にいかに対処していくかを協議する場であります。大変多くの課題がある中、特に議論すべき8つの課題を挙げさせていただきます。

2. 一つ目の課題は、グローバル化によって加速した政治・経済情勢の度重なる調整が蓄積し、多極化が進む中で世界秩序自体に起きた変化です。国力を測るGDPや技術力、影響力、人口統計といった様々な指標で見ても、上位20~30カ国は20年前の顔ぶれとは異なります。40年、80年前ともなればなおさらです。これらの国々は私達に異なる影響をもたらすだけでなく、それぞれ相対的に異なる重さ、重要性、能力を持っています。したがって、彼らは新しいバランスの構築を求め、時に構築に成功しています。そしてこれらの国の行動が、私達が現在経験している不安定さの原動力となっています。

3. 二つ目の課題は世界秩序の構造についてです。現在の世界秩序構造には様々な形でほころびが生じ、予測可能性や規律性が損なわれてきています。それどころか、かなりの混乱が生じてきていると言えるでしょう。参加国の数が増加する中、特に自国の立場に納得できない国がいた場合、コンセンサスの形成がより困難になります。このような状況は多国間主義の議場、特に国連で顕著に見られ、混乱の結果であると同時に原因でもあるのです。結果として、私達は特定の目的に向かって協力できる、志を同じくする同志国との連携に、より重きを置くようになってきています。

4. 3点目は世界の地域区分についてです。1945年以降の地域区分は、当時の有力国の活動の場また都合により取りまとめられた区分です。しかしその後、各国の能力が制約され、コミットメントに疑問が持ち上がるなどした結果、この地域区分にも変化が生じています。より穏やかな時代には、より強い協力が必要ですが、同時に広範な分野で効率的な協力が求められます。インド太平洋地域における協力体制は、穏やかな時代の協力体制の好例と言えるでしょう。

5. 3つ目は、私達はそれぞれ異なる課題に直面しているという点です。30年にわたるグローバル化は、現在、戦略的に大きな意味を持つようになった経済力・技術力の著しい集中をもたらしました。経済力と技術

力は貿易活動や投資活動、接続性・資源開発の他、モビリティにまで活用されています。権力の本質も大きく変貌しました。技術力の影響もあって、より増悪化しています。国境は国を守る効果的な防衛手段ではなくなりました。また AI や半導体チップ、環境技術やクリーン技術、宇宙技術やドローン技術といった先端技術もそれぞれ脆弱性を抱えています。これらの脆弱性に自国のみで対応できる国はほとんどありません。同時に覇権をめぐる争いも激しさを増しています。

6. 4つ目は、世界各国の姿勢の変化です。グローバル化がもたらした利益は平等に配分されず、生活レベルの向上が停滞した国では政権批判が多発しています。新型コロナウイルス感染症が残した爪痕によって、世界の不安定さはより増しました。私達は、必需品の供給を他国に依存することが何を意味するかを、身をもって学んだのです。コロナ後、多くの国・地域が戦略的自立性を模索し始めたのはそのためです。

7. 5つ目は各国による戦略的自立性確保への取り組みを背景に、リスクの高い選択肢を選択する国が、世界的に増えてきたという点です。ヨーロッパの紛争やアジア地域における国際法違反、中東地域の状況悪化の他、民用機材の武器転用事例などが顕著になってきました。長年維持されてきた合意が必ずしも遵守されるとは限らず、私達が暮らす環境の安定性に疑念が生まれています。

8. 6つ目の課題は、国連改革です。世界秩序を最も如実に体現しているのは今も国連であり、この観点からも国連改革は最重要課題であるといえます。G4グループの一員としてインドと日本は国連を近代化する方法を模索すべきです。困難を伴う課題ですが、辛抱強く取り組むべきです。

9. 7つ目はアジア地域における多極性の中心的な役割を果たす複数の大国についてです。これらの国々が自由や開放性、透明性、法の統治に基づいた秩序を指向し、各国間で全体的なバランスが保たれるようであれば、私達の共通の利益にかなうことでしょう。インドと日本が様々な関係や取り組みを通じ、この共通目標に向けてどのように互いを支えあっていくか、世界が注目しています。

10. 8点目は、インドは過去10年間の改革によって、より効果的かつ信頼のおけるパートナーに成長したという点です。ビジネス環境の整備から

インフラ開発、生活環境整備、デジタル技術の社会実装、スタートアップ育成からイノベーション文化の育成、国際アジェンダの形成に至るまで、今日のインドは過去のインドとは全く異なる国に成長しました。日本の皆様にもご理解いただきたい重要事項です。

11. 一言で申し上げますと、今日の世界はより不安定で不確実、予測不可能で先が見えません。これはインドと日本が、それぞれの国家利益また

両国関係を鑑み対処するべきであることを示唆しています。私達は、両国のため、より広範な地域のため、そしてもちろん、世界のために安定性、安全保障、自由、進歩そして繁栄を守ることができるでしょうか？

12. 私達の取り組みにおいてご検討いただきたい点が数点ございます：

- (i) 両国の経済関係はより安定した環境を構築する上で重要な要素となりうるか？両国間貿易は停滞しているものの、投資活動は活発に行われている。両国の経済関係をさらに成長させる余地はあるか？
- (ii) 新しい技術の採用は明らかにゲームチェンジャーになる。新しい技術の開発などにおいて協力拡大の可能性はあるか？半導体分野や電子モビリティ、再生可能エネルギー、AI、宇宙領域等で協力拡大の可能性があると考えている。
- (iii) 両国は共に、強力な気候変動対策を導入していることから、世界的な気候変動対策で実践的な協力を行うことができると考えている。日本はインドで、物流網開発や公共交通機関開発に参画した経験がある。エネルギー対策について異なるアプローチをとっているものの、グリーン水素の分野ではより多くの国と

パートナー関係を構築できる可能性がある。他に協力を模索すべき新しい分野はあるか？

- (iv) インドでは新たな生産地、消費地が生まれており、接続性向上の必要性が高まっている。インドでは現在、東部および西部において主要幹線を開発している。アラビア半島に通じる IMEC 事業もその一つである。また国際北南輸送回廊、東南アジア諸国とインドをつなぐ 3 か国間高速道路、北極海利用を想定したチェンナイ-ウラジオストク航路の開発などにも取り組んでいる。インドと日本は、透明性が高く連携可能な接続性の必要について意見を交わしている。本領域での協力をどのように進めるべきか？
- (v) 国際的な共通認識や良心が短期間で変わる世界において、より高い能力を備えた国際社会メンバーによる強力な開発取り組みが不可欠となってきた。グローバル・サウスの代表として、インドは特にこの重責を認識している。インドは 78 カ国で開発事業を行っている。本件でも日本との協力は可能か？
- (vi) 安全を守り、確保することは、これまで以上に重要な責務となってきた。特に海上安全と海上安全保障の重要性が増している。サイバー安全保障上の課題も抱えている。重要性は増したものの、インドが抱える安全保障上の課題は今も昔も変わらない。テロ対策がその典型だ。また、自国だけではなくイン

ド周辺地域の利益のためにも、防衛能力の強化は必要である。  
防衛・安全保障上の懸念は、今後もインドの政策構想における  
重要な要素となる。

13. 最後に、大まかに3つの見解を述べさせていただきたい。ひとつは、世界はレジリエントで信頼できるサプライチェーンの構築と、信頼できる透明性の高いデジタル取引によって、新たなグローバル化を実現しようとしているという点です。この点において、インドと日本は理想的なパートナーです。2つ目は、民主主義国と市場経済国として、両国は基本的な親和性を共有しているという点です。自由で開かれたインド太平洋へのコミットメントは、年を追うごとにクアッドによって推し進められています。クアッドによるこの貢献もまた、世界中で次第に高く評価されるようになっていきます。そして3つ目は両国が築き上げた快適な関係は、未来がもたらす機会と課題に取り組む際、より野心的な思考を行う土台になる、という点です。過去10年間におけるインドの進歩は、私たちのパートナーシップのさらなる発展を約束しています。今回の会合は、私達の協力関係の将来像を検証する場として開催されました。今後の議論を楽しみにしています。

ご清聴ありがとうございました。

\*\*\*\*\*